

山崎純一先生を追悼する文

創価大学文学部長 大梶俊夫

山崎先生が亡くなって、8カ月が過ぎた。よく言われることではあるが、亡くなって初めて、その存在と喪失したものの大きさを実感させられている。

山崎さんと私は、同じ創価大学文学部社会学科の1期生として入学して以来、41年間をともに過ごしてきた。同じ時代を生きて、同じように文学部のなかで社会学を学んできた。その共通性から得られる信頼感は何者にも代えがたいものがあった。学部長となって対応に迷う問題があれば、気軽に相談することができた。それは山崎さんが学部長の先輩であること以上に、同じ社会学的感性をもった人間として、信頼できたからである。多くの場合、判断のしかたは同じで、やはりこれでいいのだと自信を持つことができた。

私と山崎さんとは一緒に社会学科で学んだといっても、学部、大学院時代を通じて、それほど多くの接点があったわけではなかった。クラスもゼミも違っていった。研究領域も、彼はマックス・ウェーバーを中心とした政治社会学が専門であるのに対して、私はマルクスの研究から労働社会学へと進んだ。彼は平和問題研究所の助手になり、私は数年遅れて文学部の助手になった。様々な問題について話し合う機会が増えていったのは、同じ文学部の教員となってからである。そこでわかったことは、山崎さんが社会学的良識ともいうべきものを体現しているということであった。経済学部や法学部的な発想が主流を占める大学にあって、文学部の存在は貴重なものがあるが、とりわけ社会学はリフレクティブで相対化された思考を可能にする。他者の存在を意識し、それを理解しようとする。こうした社会学的な思考方法から生まれるバランスの取れた判断力が山崎さんの持ち味であり、そこに彼独特のコミュニケーション能力が加味されて、もつれた問題にも解決の糸口を見出せることが多かった。だから、彼の研究室に明かりが点いているだけでなにか安心できた。今でも何か問題があると、山崎研究室の明かりが点いているかどうか

かを見てしまう。そして彼がもういないことを確認する。

一年ほど前，暗くなった研究室の廊下を背中を少し丸めながら，ゆっくりと歩いている小柄な人影を見て，それが山崎さんだと気付いて，本当にハっとした。こんなに小さくなってしまった。それでも大学にいる。研究室に来ている。その姿は，人一倍の責任感をもち，仕事から逃げず，真面目に，ひたすらに真面目に生きてきた山崎さんの人生を象徴していたように思う。ともすると逃げ出したくなる私にとっては，あの姿は重い戒めである。

山崎先生，あなたの夢は私たちがしっかりと引き継ぎます。どうか見守っててください。